

平成 28 年度新規課題

研究区分	戦略的イノベーションプロ (SIP)	試験期間	H28~30
課題名	ゲノム編集技術等を用いた画期的な農水産物の開発育種への応用 (Ⅲ系) イネグループ 多収性の実証と栽培技術開発		
関連の重要研究課題名	Ⅱ 低コスト・省力化・高位安定生産技術の開発 2 米粉・飼料用米等の多様な用途に応じた品種選定		
主担当試験場・部	農業試験場・育種部 (共同機関：名古屋大学、西日本農業研究センター、次世代作物開発研究センター)		

【現状と課題】

近年、飼料用米の需要が高まり、実取り、WCS あわせて約 700ha の栽培面積となっている (H27)。多収品種として県育成の「ふくおこし」が 160ha 栽培されているが、国研等育成の多収専用品種 (玄米に識別性のあるもの) の栽培は乾燥施設等の別利用が必要なため、取り組みが進んでいない。

一方、国内ではゲノム編集育種技術など次世代型的水稻育種技術が急速に進展し、超多収性の形質を有するイネ (収量ポテンシャル 1.2 トン/10a) の系統育成が現実的になっている。

当県の水稲反収は全国トップクラスであり、超多収品種の収量ポテンシャルを十分に活かした有利な生産が可能である。しかし、多収米の適応性の検討は十分に進んでおらず、育成素材が乏しい状態である。

超多収品種開発には、育種素材の選定と評価は急務であるため、近年開発された超多収イネの当県での適応性を生理生態、および生産面から詳細に解析し、育種素材としての評価を行い、品種育成に資する。

【試験研究計画】

1. 極多収型イネ系統の品質収量などに関する生産力検定試験を行い、実用性について乾物生産量や収量構成要素の点などから判定 (農業試験場、西日本農研センター)
2. 極多収型イネに関する生長解析および窒素吸収量、非構造性炭水化物 (NSC) ※の成分分析調査 (名古屋大学、次世代作物研センター)



【期待される成果】

1. 長野県における極多収イネの特性が詳細に把握でき、遺伝的な育種目標を明確化
2. 水稻多収地帯における極多収イネの収量ポテンシャルを明らかにし遺伝的要因を解明